

富大体研だより

2025-41号

令和7年7月発行

富山大学体研同窓会

多くのグリーンキーパーとの触れあい 歳を重ねた自分を見つめる

富山大学体育研究室同窓会

会長 前田 孝夫 (26回生)



皆さんは、「花と緑の銀行グリーンキーパー」のことをご存知だろうか。公園やコミュニティセンター花壇の運営管理、地域における花づくりの啓発、

推進等をしているボランティアである。引き受けて7年目になる。草花が好きかと問われればそれほど強い思いはなかった。現役時代は、「彩りのある学校」を運営方針の一つに掲げ、生徒や職員、地域の方々の助けを受けてプランターや花壇に花を咲かせていた。

教員集団しか知らない自分が、様々な職業を経験した先輩グリーンキーパーと関わり、作業することで触発されている。自分よりはるかに年上の男性、女性とせっせと協力して作業を進めていく。決して、無理をせず自分の身体と相談しながら、自分のできることを見つけて作業に励む。その「緩やかな頑張り」が新鮮に映った。これぞ高齢者マンパワーである。自分がせっかちな性格から時間効率や成果を追求するあまり、自他共に無理押しをしてきたのではと反省させられた。さらには、体育授業にも通ずる仲間の個性を尊重して、共同してなどと“集う楽しさ”を大いに味わっている。

気持ちだけは若い時代と変わらないと思ってきたが、膝や腰も痛いし、若いときのように動けない自分がある。老いは各々だが、不摂生がたたり人より速そうだと自覚している。気持ちを大らかにもち、自分の身体と相談しながら何事も進めていくことが長続き、持続可能の秘訣であることに気づかされている。

そして、自分なりにできる“アンチエイジング（抗老化）”を考えた。食卓では、食する順番を守り、糖質（米等）の量を減らす。身体を動かす習慣として、早朝のハーフスクワットやストレッチ体操。太陽の下での畑仕事。足腰への負担が少ないノルディックウォーキング等から始めようと思っている。

昨年、研修として、県内の優れた花づくりを実践している花壇を視察した。その中で、黒部市立若栗小学校を訪問した。いろいろな花が見事に咲き誇る中庭花壇を見せてもらった。子供たちと職員の方、そして地域の方をも巻き込んだ取り組みだと説明を受けた。後で判ったことだが案内をしてくれた教務主任が体研同窓生だったことを知り、伝統ある花壇をしっかりと受け継いで花を咲かせ、守っていることをうれしく思った。

自分はこれからも先輩グリーンキーパーと共に、花と緑に満ちた潤いある社会となることを目指し、そして自分自身の励みとなるように続けていきたい。

持続可能な体研同窓会を目指し、ここ数年議論してきたことを実現しようと考えている。まずは、「体研だより」のペーパーレス化である。ネット社会が進みほとんどの人がスマホをお持ちだ。同窓会員とネットでつながり、素早く情報発信していく。もちろん事前にアドレス調査を行い、同意を得てから進めていくつもりだ。ネットに不慣れな会員もいらっしゃるの、調査の段階で教えていただければ、従来のように紙面で送付しようと考えている。こうすることで、これまで多額の支出であった印刷製本費や郵送料等の経費削減につながる。

また、有志による「熱魂会」が立ち上がり、時勢にあう体研同窓会のあり方を検討してくれている。より多くの会員が総会や懇親会に参加してもらえるようアイデアを出してくれている。各年代の（常務）理事会員と連絡を密にし、協力を得て、各年代会員への参加促進を積極的に働きかけていこうとしている。

どうか（常務）理事会員をはじめ会員の皆様には、同窓会が末永く存続することを願う試みにご理解を賜り、ご協力をお願い申し上げます。

一度切りの人生を愉しみたいと

富山大学学術研究部教育学系（教育学部）

富山大学大学院教職実践開発研究科

講 師 白石 翔

はじめまして。今年度より富山大学教育学部に着任いたしました白石翔と申します。生まれは広島県の三原市というところで、小学生から高校生まで隣の尾道市というところで過ごしておりました。その後、大学と大学院を卒業し、岡山県で就職し、小学校教員、私学の大学教員を経て現在に至っています。専門は体育科教育学、体育社会学、スポーツ社会学です。学内外で小学校、中学校、高等学校の体育授業がどのように行われれば、もっと学校や社会全体がウェルビーイングを感じられるのか、様々な視点から試行錯誤しています。それから、小学生から大学、社会人まで20年以上野球をしていました。一応、全国大会へ出場したこともありますので、種目で言えば野球が専門ということになるかと思えます。

話は変わりますが、最近、自分の中で流行っていて、取り組んでいることがあります。それは少し変ですが、今やっていることをゲームだと考えてやってみようということです。でも、そうすると意外と日常って、特別なことをしなくても楽しいと思え充実してくるのです。例えば、私は1月から4月に家族と合流するまでの間、単身赴任をしていたのですが、その3ヶ月間『家族に快適な富山ライフをスタートしてもらえたらクリアとなるリアルRPGゲーム（私が勝手に命名）』をプレイしながら過ごしていました。まず家族5人分の荷物が入った大量の段ボールを全て空にするステージをクリアし、次に荷物を効率的に収納できるかが課題のステージを、最低限のアイテム（収納グッズ等）を購入しながら進めました。また、様々なキャラクター（現実の人のこと）に声をかけ、富山での楽しい過ごし方を聞いて回り、転入に関わる手続き（保育園、小学校、市役所）も行いました。そうすると、通常ならば雪の降る寒い中、いろいろな場所を回ってやらなければならない面倒なことが、「今日はこれができた、明日はあれをしよう」という達成と新たな目標立ての繰り返しとなり、本当のゲームをしているかのように楽しみごとに変わったのです。

よく考えてみると、私たちが親しむスポーツのプレイ中も、これと非常によく似た状況になっています。交通手段の発達した現代社会において荷物を届けるわけではないのに、わざわざ脚のみを使って42.195kmも移動する。そんな面倒なことを「時間内に完走したい!」、「10kmを達成した。次は20km地点へ!」と、目標、課題を設定し、『富山マラソン』にして楽しみます。或いは、ボールを持ち歩いて穴へ入れれば楽なのに、草むらに入ろうとも必死でクラブのみを使って入れようと『ゴルフ』という競技にして楽しみます。一見すると、面倒で不自由なことを我々人類の大先輩が楽しみごとに変えてくれました。そして、それを受け継いだ私たちもまた、楽しみながらそれらをプレイし、とても豊かな人生を送っています。

私は、体育社会学という学問も専門にしているので、社会と人間、そしてスポーツとのより良い関係は？そのための体育授業は？といったことを常に考えながら研究しています。そんな社会は近年、変化の激しい時代と言われ、ドライブ旅行中に助手席で地図を広げる役目は、カーナビやスマホが担い、旅先やスケジュールはリクエストすればAIが全て決めてくれます。そして、このAIは、今、ものすごいスピードで賢くなっているとされています。確かに、登場したばかりのChatGPTと現在のものを比較してみると、既にそのレベルに違いがあるのに驚かされます。そんな変化の激しい時代に、私たち人間がウェルビーイングを感じるには、スポーツとどのような関係を結び、体育の授業がどのようにあれば良いのでしょうか？このような問いに向かうべく、次のリアルゲームを設定し、それをクリアするプロセスを、私はチームでプレイしたいと思っています。富山大学体育研究室同窓会のみなさま、ぜひともチームに加わってください。そして、一緒にクリアを目指しましょう。いつでもご連絡お待ちしております。どうぞよろしく申し上げます。

体研で学んだ「熱魂」を胸に

大門 秀司 (43回生)

私は2024年9月に富山県教員を退職し、上越教育大学いじめ・生徒指導研究研修センターで勤務しています。

私の現在の主な仕事は、上越教育大学いじめ・生徒指導研究研修センターで実施している子どもの学校生活アンケート：SLQ (Scool Life Questionnaire) を分析して学校に訪問し、いじめ被害や不登校リスク、学校不適応傾向等のある子どもを先生方にお伝えして子ども理解に役立てていただいたり、地方公共団体のいじめ問題専門委員などを務めたりなど、学校現場や教育委員会の支援に取り組んでいます。

私の原点にあるのは、体研での豊かな体験です。もともと社会科希望だったのですが、体研の雰囲気にかかれ、希望提出の直前に社会から体育へ書き直したことを覚えています。体研に入り、講義の中で、できないことができるようになった喜び、堀川小学校の教育実習で清水健太郎先生の学級に配属され小学校教育の

面白さに心を奪われたこと、臨海や登山、スキーなどの実習で困難なことを乗り越える喜びなどなど、多くの経験をしました。特に臨海では、何時間も海で泳ぎ、立ち泳ぎをしながら食事を摂るなど、他のコースでは決して味わうことの出来ない経験をさせていただきました。

堀田朋基先生や金久博昭先生には、研究の面白さ・奥深さを教えていただきました。ご指導いただいた研究の楽しさは、今の私の原点になっています。学校現場で実践をするには、勘と経験だけに頼るのではなく、理論的背景をもつことの大切さを学びました。常に実践を客観的に見つめ、子どもの事実から何が言えるのかを理論的背景から考えてきたことが今の職につながっています。

今後も体研で学んだ「熱魂」の思いを大切にしながら、学校や子どもたちの役に立つ研究に邁進していきたいと思っています。

体研があつてこそその自分

室 友理恵 (57回生)

私は小学校からバレーボールを始め、高校の部活の顧問のような憧れの教師になりたい、そしてバレー部でレベルの高いプレーがしたいと思い富大に入学しました。入学したものの、当時の中高体育現役合格の難易度から教師の夢は早々と諦め、大好きだったバレー部も一年次に辞めてしまい落ちこぼれた大学生活を送っていました。ゼミの大川先生には様々な面で大変ご心配をおかけしました。そんな中でも体研の同期や先輩後輩たちに変わらず仲良くしてもらい、楽しかった当

時のことを今でも mixi を見ながらよく思い出します。

大学卒業後、自動車ディーラーに就職し、紆余曲折ありながらも今は父の経営する中古車販売店で後継者として働いています。バレーボールは今でも現役で続けていますが三年前、『自分が今もバレーボールを続けていられるのは今まで関わった方のおかげではないか』と気づき、コーチ I の資格を取得しました。その際富大バレー部の憧れだった小畑先輩から資格の指導を教わったことは、体研の縁を心底感じさせる瞬間でした。



それからはご縁あって近所の高校のコーチとして部活指導に携わっています。昨年はJOCにも微力ながら関わらせていただきました。バレーボールをもっと好きになってほしい、かけがえのない学生生活を精一杯頑張りたい、そんな想いで仕事の合間を縫っては生徒のサポートに励んでいます。

また、私は仕事の傍ら地元の商工会青年部と青年会議所で自己研鑽のため、地域を活性化させるために日々活動をしています。ここでは体研で培った行動力と体力気力が今でも生きているとつくづく思います。大学時代は教師の夢を諦め、部活を辞め、色んなことから逃げてきてずっと後悔をしていましたが、団体に入っ

て、体研で得た人との繋がりや、人は人によって磨かれることを再認識し、自分は常に自分に挑戦しなければならないと気づき、これまでの自分だったら避けていたようなことを大きな決断として来年度挑戦することにしました。まずは自分が楽しむ。頑張っている仲間がいるからこそ自分も人のために頑張る。体研で出会った人々、思い出が私の人生に彩りを添えてくれたことは間違いありません。恩師の教授、仲間たちと卒業した今でも飲み会やゴルフで一緒に過ごすことができている私は幸せを感じています。体研魂は私の心の中でこれからもずっと現役です。

「熱魂」は永遠に不滅です

福原 渉太 (62回生)

卒業後、私立高校で教員として働く中で、学童保育も担当する機会がありました。子どもたちが放課後に好きなことを自由に探求し、のびのびと過ごせるその空間には大きな可能性を感じました。しかし、現場には厳しい現実もありました。定員が埋まり、受け入れを断らなければならない日々。ある日、入所を断る電話をかけた際、保護者が涙ながらに「学童保育に預けられなければ私は仕事を辞めるしかないんですか？この先どうしたらいいんですか？」と訴えられ、その一言が私の価値観を大きく揺さぶりました。学童保育は子どもだけでなく、親にとっても人生を支える重要な存在だと気づかされた瞬間でした。

この経験から、「親と子どもが諦めることなく選択できる社会をつくりたい」と決意し、25歳で起業しました。現在は富山県内で7つの保育施設を運営し、少しずつですが社会に選択肢を増やすことができていると実感しています。

保育で私が大切にしているのは、「やらされる」ので

はなく「自ら考えて行動する力」、そして「自らおもしろがる力」です。それは大学での数々の実習の中で自分たちで考えて活動する力の大切さを先生方に教えていただいた事。そして辛く苦しい実習の中でも楽しんで取り組もうとする、明るく前向きな頼もしい同期達がいちからです。教育実習では打ち上げの飲み会の指導案を深夜3時まで書いたあの無駄とも思える時間が、今の自分を形作っています。

いま、大学の同期とともに「タイケン（体研）マルシェ」というスポーツとマルシェを融合させたイベントを企画し、昨年は1000人以上の方々に楽しんでいただきました。もちろん全員がボランティア。仕事が終わった後に集まり、23時からのミーティングでアイデアをぶつけ合うあの感覚は、まさに体研時代に戻ったような熱い時間です。「熱魂」体研を卒業しても、この精神は私の中で生きています。

これからも、子どもたちとその家族にとって「選択できる」社会をつくるため、熱魂を燃やし続けます。



子どもたちの未来を支えるために～教育学部での学びから～

富山大学教育学部共同教員養成課程

澤田 亮平

教育への情熱と将来への希望を胸に、私はこの学部で学ぶ日々を大切にしています。私が所属する学部の名称が「人間発達科学部」から「教育学部」へと変わったことで、学びの環境にも大きな変化がありました。この変更により、小学校教諭免許状に加えて、別の校種の免許状を取得することが卒業要件となり、教員を目指す学生がますます増えたことで、学部全体に一層の活気が生まれました。そのような刺激的な環境の中、私自身も学業や教育実習に真剣に取り組み、充実した学生生活を送ることができました。

教育学部では、富山大学単独で実施される講義に加え、金沢大学と連携して実施される講義もあります。このような仕組みにより、異なる視点や知見を得る機会が広がり、学問的な視野を大きく広げることができました。特に、富山大学の体研の学生は、金沢大学の保健体育専攻の学生と交流を深める機会がありました。また、金沢大学に赴いて受講する講義も設定されており、富山と金沢の学生間で活発な交友関係が築かれています。このような学びの場は、単なる講義の枠を超え、学生同士の協働や異なる専門領域の視点を共有する貴重な機会となりました。

教育学部では、教育実習やインターンシップといった、実際の教育現場で児童生徒と直接関わる学びも充実していました。私は教育実習において、中学1年生を対象にダンスの単元を担当しました。授業の準備では、学生同士で意見を交換し合い、現場の先生方から助言をいただきながら、生徒が主体的に学びに取り組める授業の構想を練りました。特に、生徒の意見をくみ取り、それを授業に反映させる難しさを実感しましたが、その分多くの学びを得ることができました。この実習経験を通して、教育現場での実践力を培い、生徒一人ひとりの視点を大切にす姿勢の重要性を深く理解しました。

ゼミナールの活動では、地域に根ざした運動あそび教室を幼児から中学生を対象に実施しました。子どもたちが運動や身体活動の楽しさ、心地よさを味わえるよう、学生同士で協働しながらプログラムを企画・運営しました。この活動の一環として、関連する学会にも参加し、活動の概要や私たちが大切にしている方針について発表しました。その場では、様々な大学の先生方から貴重な意見をいただき、自分たちの取り組み

を理論的な観点からも深めることができました。これらの経験を通じて、理論と実践を往還させる学びを実践し、自身の教員としての資質・能力を着実に高めることができたと感じています。

大学生活の中で、私は教職学生として自身の将来を見据え、さまざまな活動に積極的に取り組んできました。現職の教員を交えた教育意見交換会を主催し、現場の声を直接聞く機会を得るとともに、自分の考えを伝える貴重な経験を積みました。また、フリースクールや教育機関を訪問し、子どもたちがさまざまな環境で学んでいる現状を理解することができました。さらに、地域の教育ボランティア活動に参加し、子どもたちとの交流を通じて、教育現場での責任感の重さを実感しました。これらの経験から、人とのつながりの大切さ教育に携わる者としての責任感を深く学びました。大学生活4年間で得たこれらの学びや経験は、私にとって大きな財産です。

将来教員になった際には、これまでの経験を存分に活かし、生徒たちとともに学び続ける姿勢を大切にしたいと考えています。また、全ての子どもが個性を伸ばしながら成長できる環境をつくるために、教育者としてどのような役割を果たせるかを常に考え続けます。大学で培った学びや価値観を礎に、子どもたちの未来を支える存在でありたいと強く思っています。



令和6年度 特別研究・修士論文テーマ

伊藤 歩実	人はなぜ、どのように歩いているのか — 「動機」と「経路選択特性」から —
大倉 秀太	富山大学運動部活動の活性化にむけた一考察 — アスレチック・デパートメントの必要性について —
小柳 舜真	子ども達は新しいスタジアムに何を求めるのか — 「とやまスタジアムランドプロジェクト」をもとに —
藤田 和希	Bリーグの非観戦者における観戦意志変容プロセスと観戦阻害要因に関する縦断的研究
青山 快	ブラジル人アスリートの競技中における思考傾向
板倉 綾香	身体リテラシーとリーダーシップの関係性
上野 豪斗	特別支援学校の児童生徒の興味・関心を引き出す健康教育の動画作成に関する事例研究
荒木 陽翔	「固定遊具」が子どもの社会性に及ぼす影響に関する文献レビュー
廣田 珠美	乳児の寝返り動作習得過程の事例的観察
藤田 藍	短距離選手を対象とした体組成・心理的競技能力と競技成績の関係性 ～富山大学男子陸上競技部に着目して～
堀井 小葵	「女性アスリートの三主徴」の予防のための啓発活動 ～富山県A高等学校を対象にして～
山下 壮一郎	運動における競争時のマスター目標の設定が運動に及ぼす影響
植田 光陽	バスケットボールにおける勝利チームのクォーターの点差に関する研究 ～B.LEAGUE チャンピオンシップに着目して～
小形 佳史	バスケットボールにおいてベンチメンバーが試合の勝敗に及ぼす影響 ～2024年パリオリンピックの男子バスケットボールからみて～
菅谷 元気	バスケットボールのミスマッチが試合に及ぼす影響に関する一考察 ～B.LEAGUE 2024-2025 シーズン1部リーグの試合から～
谷 寿晃	バスケットボールのタイムアウトがオフェンスに及ぼす影響について
長田 和也	バスケットボールにおけるピックアンドロールが勝敗に及ぼす影響 — その種類別にみて —
今井 麻絢	ボースハンドシュートで有利にシュートが打てるボールの持ち方について
中島 大輔	バレーボール競技におけるジャンプサーブの新しい練習方法に関する研究 ～手首の掌屈に着目して～
仲田 峻	マット運動における前方倒立回転とびの新しい練習方法に関する研究
三浦 康平	鉄棒運動の脚かけ上がりにおける補助器具を使用した練習方法に関する研究
室 路菜	陸上競技 100mにおける加速局面での前傾姿勢の保持を目的とした補助器具の有効性について



体研での実習と教員生活

石崎 恵嗣 (35回生)

「一年生はテント担当な」

一年時の登山実習のとき、体の大きな私はテントの幌を運ぶことになり、荷物の総重量が三十キロをゆうに超えた。富山駅で優しい先輩が肉十キロを差し入れてくださった。そして、私の荷物に五キロが追加された。

室堂を出発して劔沢までが苦しく、「このまま谷に落ちれば、どんなにか楽だろうな」と思いながら歩いていた。

夜、テントの入口に寝ていた私は、しばらくテントの外に顔を出して夜空を眺めていた。天の川がくっきりと見え、流れ星も次から次へと走っていた。

朝三時半に起床し、朝食を作り始めた。私が運んだ五キロの肉は、においがするというので廃棄となった。

さて、私は、教員になるまで相撲の経験がなかったのだが、「相撲競技」に関わらせていただき、充実した

教員生活を送ることができたと感じている。

中学校教員として相撲部の監督。教育委員会体育科の職員として、地方巡業「大相撲福光場所」の開催。富山県相撲連盟事務局として全国大会等の運営。国際相撲連盟の役員として、国際大会の抽選・記録委員や副審。そして昨年度は、全国相撲指導者研修会の講師として、勤務校での武道「相撲」の実践事例を発表する機会をいただいた。

体験活動は、学習意欲、労働意欲、努力や忍耐といった「非認知能力」を伸ばすとされている。体研での様々な実習は、教員になった私に新たなことに挑戦する「意欲」を、そして「努力」「忍耐」といった力を伸ばしてくれたと感謝している。

私は、今年初めて、特別支援学級の担任となった。新たな挑戦である。ぜひ、これからも前向きに取り組んでいきたいと考えている。

「忘れられない思い出」

杉山 ゆかり (35回生)

還暦、そして退職を迎え、月日の経つのは早いものだとつくづく感じる今日この頃である。私の大学時代は、初心者で始めた女子バレーボール部と、この体研での思い出が全てとあってよい。先輩や後輩、そして、同期の素晴らしい仲間たちとの濃密な思い出が詰まった忘れられない時間を過ごした。

一番の思い出である登山実習では、一年時に、剣岳山頂への一般ルートと長次郎尾根ルートの二ルートからの登頂、三年時には、立山縦走の二パターンの登山を経験することができた。別山での雪渓訓練の講師の先生は、県警山岳警備隊の谷口係長であったと記憶している。滑落停止がうまくできなかった私は、危うく谷口先生に救助されそうになった思い出がある。仙人池や阿曽原の小屋に泊まりながらの縦走は、私にとって何の文明の利器にも触れない初めての自然体験であっ

た。阿曽原温泉で久しぶりにラジオの音を聞き、日航ジャンボ機墜落事故を知り皆で顔を見合わせたことを思い出す。臨海実習では、髪についた白いオブラートの様なものを何だろうとそっと取ってみると、たくさんの毛穴があいた大きな頭皮の一部であり驚いた。船上の先輩がポットからおかゆをお椀に入れて私たちを励ましながら渡してくださった声は今も耳に残っている。赴任した先々の学校での水泳の指導時に、子供たちに話して聞かず話題には事欠かなかった。その他、突然の腹痛で先輩に介護してもらったディスタンスの実習、体研出身の多くの先輩教員と出会えた立山少年自然の家の開所時の行事参加など、思い出は尽きない。

現在は、週に三日学校保健に関わる仕事をさせていただいている。数々の思い出に感謝し、一日一日を大切に過ごしていきたい。

「できないことに遭遇して、初めて何が分かっていないのかを理解する」

谷本 和信 (35回生)

今春、教員を定年退職した。最後の1年間は、定年延長による教諭としての正に授業を中心とした毎日だった。体育専科教員として、週に25時間、全校の13学級の体育の授業に携わった。この最後の1年間の体育科での授業漬け、子どもと一緒に汗まみれの毎日が、自分の心の底にあった教員魂をよみがえらせてくれたとつくづく感謝している。

大学に進学した昭和57年の春から夏、一般教養の授業に通う毎日に疑問を感じ、来る夏の臨海実習に向けたプールでの水泳実習の厳しい練習にばかり気持ちを注いでいる自分だった。その当時は、受験勉強は進学のための手段であり一般教養はその延長戦のように感じ、いわゆる勉強におもしろさや感動を感じることができなかった自分は、芯からまじめになれない自分に失望しつつ、体研生の同期に対して自分への共感を求めている。

教員になり37年余りの歳月を経て、ようやく気づいてきたことは、「分かっている。知っている」というのは、物事の理解の始まりであり、「できないことができるようになる」ことで理解が深まるということだ。できないことに遭遇して、初めて何が分かっていないの

かを理解することができる。「よく分かっているから。もう、知っているから」とこれまでの人生で何百回、何千回も言い訳をしてきた。でも、それは、自分の力で、自分の考えで、何かを成し遂げたいのに一步も進んでいない自分を直視するのがつらかったからではないか。

体研の実習は、プライドで肩をいからせて、目をつり上げている自分に対して、温かく、さらに、高みを目指す厳しさはロマンなんだよと優しく誘ってくれる先輩方の熱にあふれていた。あの先輩たちは、痺れるほどかっこよく、おもしろく、それぞれに個性的な生き方をお持ちで、あこがれの存在だった。

およそ10km、7時間に及ぶ遠泳が終わった日の翌朝、にやりともせず、体研生の前に立つ先輩たちの姿に、もう次が始まったんだという緊張感が走ったのを覚えている。熱い魂と言うけれど、仲間を思い、自分ができないことへも謙虚に立ち向かう熱く一途な背中を見せさせてくださっていた。みんなそんなロマンあふれるかっこよさを身にまとった大学生だった。今も、これからも、それは、自分の原点であり、目標であり続けると確かめている。

つながりを感じて

利川 薫恵 (35回生)

3月31日で教員を退職しました。大学卒業後は、小学校、高校で臨任講師を務めました。その後は、中学校教員として35年間務めました。

大学1年生の夏、ピッケル、アイゼン、寝袋などたくさんのお道具を準備して臨んだ登山実習は強く記憶に残っています。準備を進めている私に「もし命を落したら……」と心配する母の言葉を今も思い出すことがあります。その時は、「そんなもん大丈夫やちゃ」と笑って軽く返しました。母は、初めて見る登山の装備

に驚き、何かあったらと心配したのだと思います。それに気づいたのは自分が親になって、我が子を愛おしく思い、なにものにも代え難いものだと感じた時です。子を思い、心配になるものだと。

現職中は、生徒の命を守ることを一番に考えていました。どの生徒も親からもらった命、たくさんのお道具のつながりの中の大切な命です。授業で命のつながりを取り上げ、一緒に考えたこともありました。修学旅行のテーマを「命のつながり」として企画したこともあ

りました。

命のつながりや命の大切さを考える機会を与えてくれた母の年齢を4年も越えてしまいました。今は、母にはなかった退職後の人生を満喫しようと思っています。4月以降は、初孫の顔を見に行き、伊勢神宮を参拝し、遠方にいる叔母二人を訪ねるなど、つながりを



感じながら現職中にはできなかったことをしています。これからは、孫との同居生活を楽しみにしながら家中の片づけをします。第二の人生は、家族のために、地域のために、自分のために、命のつながりを感じ、大切にしながら過ごしていきたいと思っています。



還暦を迎えて

中山 隆博 (35回生)

大学を卒業して早いもので37年。無事に還暦を迎えることができ、節目の年を迎えたことに感慨深い思いです。教員の定年延長に伴い、管理職からは退いたものの、春からは原点に立ち返り、体育専科として子どもたちと一緒に日々汗を流しています。年齢には抗えませんが、体を動かす喜びは変わらず、教える中でこちらが学ぶことも多くあります。これからも健康に気をつけながら、あと少し教育の現場で自分らしく過ごしていきたいと思っています。

これまでの教員人生において大きな心の支えとなっていたのは、「体研」で過ごした濃密な時間でした。当時、小学校課程から「体研」に進んだのはわずか3名。(内1名は、先年鬼籍に入り、今日の感慨を共有できないこと、とても残念に思います。)不安も多い専門課程のスタートでしたが、エネルギーあふれる先輩方に憧れ、真摯な後輩たちに触発され、心許せる同期と共に過ごす日々の中で多くのことを学び、成長へとつなげていくことができました。

特に、夏・冬の登山実習、スキー実習においては、先生方のご指導の下、計画、立案、調整と、自分たちが運営の主体となり進める経験を積ませていただきました。こうした経験が、学校現場において、全体を俯瞰し、安全に十分配慮しながらも、できる限り子どもたちに企画・運営を委ね、小さな失敗を許容、改善しながら共に創り上げていく行事運営の礎となっています。

体育科は、単に運動能力を育てるだけでなく、子どもたちの心身の健全な成長を支える大切な教育領域です。様々な活動の中で、うまくいかないことにどう向き合うか、努力を重ねる大切さ、仲間と支え合う喜びを、体験的に学ぶことができます。まさに「生きる力」を育む貴重な場であると日々子どもたちと向き合う中で強く感じています。

還暦を迎え、再び子どもたちと直接ふれ合う立場に戻った今、改めて運動を通して子どもたちのよりよい成長のために力を注いでいきたいと思っています。

あのことろ、そして、これから

山崎 里美 (旧姓 有島) (35回生)



「あのことろ」の大切な三人をつづりたい。

一人目は、亡き父。父は、中学校の保健体育教師であり、体研の卒業生だった。中学一年の時、隣のクラスの担任が父であった。この一年間、私は父から保健体育を教わった。次の二年間、直接教わることはなかったが、父は、生徒指導として我が母校に君臨した。

多くの生徒から一目置かれ、慕われ、やんちゃな生徒とはガチンコで向き合う教師だった。酒が好きで、傷付きやすく弱い一面をもっていたが、小さい者、弱い者への愛情の深さが、誰よりも父を強くたくましくさせていたのだと思う。父と過ごした三年間は、私にとって大きかった。ごく自然に保健体育の教師になりたいと思うようになり、富大・体研へとつながり……そして、今が、ある。

二人目は、女子バレーボール部監督、北村潔和先生だ。研究でお忙しい中、毎回、指導に来てくださった。「練習を見ない者が、レギュラーやベンチを決め、ゲームを采配するのは、部員達に失礼だ」とのお考えからであった。この教えを、指導者としての本質と捉え、子供の姿をよく観ることを大切にしてきた。よく観もしないで、知ろうともしないで評価するのは、子供に失礼だ。

三人目は、ゼミでお世話になった白川郁子先生。白川先生は、東京育ちの都会的空気を纏った威勢のいい女性だった。その頃は、「女だから」と様々な方向から逆風が吹いていたに違いない。その中で、教授、舞踊家、母、妻、嫁等々の、何足ものわらじを履き、私たちの目の前に凜として立っておられた。働く女性のロールモデルであり、憧れだ。

さあ「これから」だが……。四月から担当している通級教室の子供たちを愛おしみながら、二年間かけて考えていこうと思う。



令和6年度 総会

令和6年8月12日(月) とやま自遊館



— 会計報告 —

令和5年度 決算報告

I 一般会計

収 入	△収入減			単位:円
項 目	予 算 額	決 算 額	比 較 増 減	備 考
前年度繰越金	238,446	238,446	0	
年 会 費	300,000	198,000	△102,000	3,000円×66口=198,000
雑 収 入	3,000	337,649	334,649	補填及び総会懇親会余剰金
合 計	541,446	774,095	232,649	

支 出	△前年度比減			
項 目	予 算 額	決 算 額	比 較 増 減	備 考
会 誌 発 行	90,000	102,850	△ 12,850	体研だより40号
通 信 費	300,000	173,704	126,296	令和4年度関係通信費 郵送費 105,242 令和5年度関係通信費 はがき・封筒等 68,462
会 議 費	50,000	52,416	△ 2,416	理事会費
事 務 費	10,000	3,512	6,488	ラベルシール等
総会準備助成	50,000	50,000	0	R6.8.12総会担当新川地区へ
学生研修等助成	40,000	40,000	0	富山大学体育研究会へ
予 備 費	50,000	48,365	1,635	慶弔費
合 計	590,000	470,847	119,153	

収支差引残高：774,095 - 470,847 = 303,248円
303,248円は次年度へ繰り越します。

II 特別会計

定期貯金 600,000円
普通貯金 3,915円

603,915円は次年度へ繰り越します。

令和6年度 予算(案)

I 一般会計

収 入	△収入減			単位:円
項 目	予 算 額	決 算 額	比 較 増 減	備 考
前年度繰越金	303,248	238,446	64,802	
年 会 費	270,000	198,000	72,000	3,000×90口
雑 収 入	16,752	337,649	△ 320,897	
合 計	590,000	774,095	△ 291,000	

支 出	△前年度比減			
項 目	予 算 額	決 算 額	比 較 増 減	備 考
会 誌 発 行	90,000	102,850	△ 12,850	R6年度41号
通 信 費	300,000	173,704	126,296	令和5年度関係通信費 R5年度40号等郵送費 112,432 令和6年度関係通信費 はがき・封筒等購入
会 議 費	50,000	52,416	△ 2,416	会誌編集会議 総会準備会議・理事会
事 務 費	10,000	3,512	6,488	ラベル代等
総会準備助成	50,000	50,000	0	R7.8月総会担当砺波地区へ
学生研修等助成	40,000	40,000	0	富山大学体育研究室へ
予 備 費	50,000	48,365	1,635	慶弔費
合 計	590,000	470,847	119,153	

II 特別会計

定期貯金 603,915円

編集後記

体研だよりの編集に携わり10年目を迎えました。途中、新型コロナウイルス感染症により発行を見送る年もありましたが、今年度も皆様のご理解とご協力のおかげで「富大体研だより第41号」を無事に発行することができました。貴重な時間を割いて原稿をお寄せいただいた皆様に、心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

2035年までにガソリン車の新車販売が終了するそうです。後10年。長いようであつという間の10年です。きっとその10年の間に私たちの生活を大きく変える様々な出来事が起こることでしょう。楽しみですが、一抹の不安も心の隅に残ります。私たちの生活は大丈夫なのだろうか？変化に順応できるのだろうか？「持続可能な社会」私たちの豊かな生活を守るためには、見直さなければいけないこと、さらに発展させなければいけないことがたくさんあるようです。

さて、今年度、体研だよりも「持続可能」に向けて新しい取組を始めます。SNSを活用した紙面の配信とネットワークづくりです。この取組が体研同窓生の皆さんに受け入れられ、よりよい取組となることを願っています。次の10年に向けて、体研同窓生の思いと絆がさらに熱く強くなるように取り組んでいきたいと思ひます。

(N.T)